

【学園研B】

1. 研究課題名

ローベルト・ムージルのブルク劇場の関係について—ムージルのナショナリズム批判に関する研究 —

2. 研究代表者名

所属学部：人間関係 職名 教授 氏名 長谷川淳基

3. 研究分担者

所属： 職名 氏名

所属： 職名 氏名

所属： 職名 氏名

4. 研究成果の概要（1，200字程度で記入。ただし、図・グラフは使わないこと）

学園研究費の助成をお願いした当初の研究目的は以下の通りであった。第1次大戦敗北後、オーストリアではナショナリズムが台頭した。本研究は、1) ウィーン・ブルク劇場の人事と上演演目にこのナショナリズムの高まりを確認すること、2) この時期に劇作家でもあり演劇批評家でもあったムージルの、ブルク劇場への批判意識を同じく確認すること、3) この批判意識がムージルの文学作品に形象化されている点について調査研究する、というものであった。

これら3点について、以下の点が明らかになった。

- 1) については、第1次大戦後のブルク劇場の監督と俳優人事について、ウィーン大学教授のハインツ・キンダーマンの論文においてユダヤ人排斥の思想が確認された。
- 2) ムージルの第1次大戦終了後の時期、ウィーンにおいてチェコ人とみなされに至った。このことで、ムージルのブルク劇場側から、直接の被害を被ったことは確認できなかった。しかし、ジャーナリストとしての活躍の場は著しく制限を受けたことはムージルの日記、手紙から確認できた。すなわちムージルのチェコの新聞に関しては、執筆の場を与えられたが、ウィーンの有権紙においてはそうした機会を与えられなかった。
- 3) 20年代に書かれたムージルの2作の劇作品のうち、とく1923年の喜劇『ビンツェンツとお偉方の女友達』ではウィーンの著名人がモデルに取られ、彼らの描写を通しての同時代批判が顕著である点については、オーストリアのナショナリズム批判が文学化されたものとみなしうる。

また『特性の無い男』の第8章「カカーニエン」におけるオーストリアならびに周辺諸国の描写についても、オーストリアの戦後ナショナリズムへのムージルの批判を読み取ることができる。

これらの成果については、さらに詳細を調査して、平成21年度中に論文に纏める予定である。

以上